

昭和初期の世相の追憶

koberyo1

東京・渋谷の家は、安普請であったためか、杉材の乾燥が十分でないため、柱は縦に音をだして割れた。この音を深夜に聞くと、バシッと肝を冷やすような大きな音で、子ども心にも不安であった。

当時の子どもにはテレビもラジオもなかった。情報源はほぼ新聞だけに限られ、新聞は子どもには大変むずかしく、おいそれとは読むことができなかった。

東京放送局JOAKができたのは大正13年であったとのことだが、ラジオが我が家で聞くことができるのはそれよりもかなりあとのことで、ラジオからの実況中継で最初の記憶に残っているのは相撲であったように思う。

炊事はガスと炭火の併用が主だった、と思う。昭和の初期だったが、東京の大都会ではすでに都市ガスや電気などのインフラは整っていた。風呂は家についていなかったから、銭湯に行ったものだったが。

日々の生活に必要なものは市場で調達するのはいまもむかしも変わりはないが、しかし、その頻度はいまよりも多くなかった、と思う。というのも当時、「御用聞き」という存在があったからである。

たとえば午前中にわざわざ家にまでやってくる「御用聞き」というものがあって注文を取り、午後に配達をしてくれていたからだ。いま思えば現在もあるような商売の基本的メニューというか、原点はすべて御用聞きにあったように思う。

御用聞きばかりではない。物売りというものもそうだ。昭和初期の朝の光景である。物売りでまず最初に思い出されるのは、朝、外が明るくなりはじめると、「ナットー、ナットー」と声を上げながら納豆を売りにくる物売りがいる。東京は朝早くからの「ナットー、ナットー」の声で眼が覚めるのが普通の生活であった。わたしが住んでいたあたりでは、たしか新聞配達と前後して納豆売りがやってきたことを思い出す。

それから豆腐屋も専用のラッパを吹いてやってくる「豆腐屋」の「とおふー、とおふー」の声も忘れがたい朝のと東京の風物詩だった。できたての豆腐を味噌汁にいれ、食べることができたのは、日本全体が貧しさに喘いでいた時代ではあったけど、いまはもう望むべくもない最高の贅沢の一つ、ではなかったか、と思う。

たとえば、今日ではどの家庭でもふつうにある冷蔵庫も当時は不要ではなかったか、と思うのだ。たしかに夏は氷売り、冬は炭屋という商売があって氷を入れるタイプの冷蔵庫に氷を売りにきたが、冷蔵庫を持っている家庭はごくごく少数ではなかったか、と思う。なぜなら、わざわざ冷蔵して家庭内にストックするまでもなく、頻繁に御用聞きがやってきたし、物売りがきたからである。コンビニがしゅっちゅう街中を移動し、各家庭を訪問しているようなもだったから、冷蔵庫なんて無駄なものがあるはずがない。

そして毎朝午前10時頃になると、酒屋さんが御用聞きにやってくる。では、酒屋さんに何を注文するかというと、カンヅメや味噌、醤油、酒、ビールなどで重量のあるものがメインであった。そして魚屋も八百屋もきたように思うが、それらについては余り記憶が残っていない。

当時のことをいろいろ思いだしてこれを書いているのだが、その頃、行政によるゴミの回収はなかったように思う。

いまは便利な行政サービスが発達しているおかげで、だいぶ便利になったかと思う。「燃えるゴミ」とか「燃えないゴミ」であるとか「ビン・缶」の日であるとか、さらに「プラスチックのゴミ」など、分別回収のうえ、所定の場所にだしておくと回収してくれるといったしくみやルールがきっちり定められているので、わたしたちの生活がゴミで埋め尽くされることがない。現代、ゴミ回収は高度な行政サービスの発達のおかげで無料だし、習慣になっているけれど、これは当たり前のことではなく、わたしたちはかなり恵まれていると思った方がいいと思う。

昔はインフラとしてのゴミ回収自体がなかった。ゴミ回収がないという状態は想像しにくいだが、当時、新聞や雑誌、さらに包装紙などは、不定期に「クズ屋」がきて買ってくれた。「竿バカリ」といった器具で、「一貫目いくらで買うよ」（一貫目というのは重さの単位）という時代があったのだ。いわば、こんにちでいう古紙回収業者である。それゆえ、古紙はゴミという感覚はなかった。

ゴミと切っても切れないのは、蠅とか蚊である。むかしはわたしたちの生活の中で、蠅と蚊と共存していたように思う。

蠅を捕らえるために「ハエ取り紙」というものがあつた。天井から「ハエ取り紙」といったものを吊るし、飛来した蠅をねばねばした粘着力のある紙におびき寄せ、捕らえるという方法で、これがもっとも普及していたハエ取りグッズなのであつた。こうしたものは薬局で売っていた。また「ハエ叩き」といった。ごくごくシンプルな用具で蠅を退治するグッズなども売っており、こういう用具は蠅対策として当時、どの家にも必ず常備されていたものである。

今にして思えば、強力な殺虫剤はなかった。蠅の大量虐殺がはじまったのはごく最近の話で、「ハエ取り紙」でちまちまと蠅を捕獲していたときは、人間と昆虫は共存していたということになる。

蚊についてはその対策として、カヤを吊ったり、蚊取り線香をつけるしか対抗策はなかった。そうしてそれは自然に順応する、いわば毎年くる夏の生活であり、蚊に関していえば現在もおなじ蚊取り線香がうられているように進歩はないようであるが。

少々くさい話になって恐縮だが、われわれ子ども時代の便所は汲み取り方式のものであり、現在の水洗方式はそれからのかなりの進化、大きな発明ではないか、とわたしは思っている。

とはいえ、当時の汲み取り方式については、これはこれで一つの技術であり、相当に価値のあるものとして聞いていた。それは作物を育てるものであり、近隣の農家は屋根付き雨水止めの「肥溜め」をいくつも持っていた。

はじめに汲み取りに家を一軒づつまわっていたのは「お百姓さん」で、これが昭和の15、6年頃には、「汲み取り権」なるものを事前に購入しておき、それを汲み取り作業料として汲み取り方式に変化していったのだつた。

さて、わたしの記憶というか、耳にいまでも鮮明に焼き付いているのは「物売り」の声である。今でも耳にするのが、物干し台と物干し竿、それとキセルの修理である。

「金魚や、金魚」とかの金魚売りとか、風鈴屋とかを夏の風物詩として思いですが、風鈴屋に関していえば、売り声はなかったように思う。風鈴自体に音が出るから、もしかしたら売る声が必要なかったのかもしれない。風鈴もむかしはガラスのものが多かったように思うが、いつしか姿を消し、金属製のものに変化していったように思う。

昭和の初期、わたしが子どもだった頃、子どもが駆け出してゆくものに「紙芝居」の拍子木の音、また「チンドン屋」がある。紙芝居はいまでもありありと「黄金バット」が頭のなかに思い浮かび、英雄・黄金バットはわたしのなかで生き続けているのだ。

「チンドン屋」は広告宣伝ということなど、子どもにはどうでも良いことだであった。面白おかしく人目につきやすい奇抜な服装をして、太鼓や三味線、喇叭などを鳴らし、商店や市場の開店披露や大売り出しの長い幟をもち、練り歩くさまが面白かった。昭和の初期だけで、その後、しだいに姿を見る機会がじょじょに減っていったように思うのだが。

当時の子どもにとって珍しかったのは「飛行機」だった。爆音が轟くと必ずといっていいほど、空を見上げたものだ。

それから忘れられないのは駄菓子屋だ。駄菓子屋では子どもたちのよろこびそうな菓子や、メンコ、ビー玉、コマなどの他に、トンボを取るための竿とかモチとか、虫取り網なども揃っていた。子どもの口にちょうど入る程度のサイズのミニサイズの黒飴があって、たしか値段は一銭というのがあった。

冬は石焼き芋、夏は棒付きキャンデー屋が繁盛したものだ。ハイカラなのはコロツケで、それからトンカツは肉屋でも少々高級だったかと思う。近所の肉他の隣には、当時の比較的新しい商売だったかと思うけど「煮豆屋」というものがあり、「うぐいす豆」と称してグリーンピースを甘く煮たものが子どもたちに人気を博していたかと思う。

それから映画だが、じつはトーキーの技術が入ったのは昭和の初期なのだ。昭和の6年のことだった。映画会社各社はトーキーという夢の技術をもって熾烈な競争の時代に入ったが、これはこんにちに続く映画産業の基礎作りの時代でもあった。